

# グリーン四国

No.1232  
2022年  
11月号

## 四国森林管理局長就任あいさつ

【詳細は2頁】



石鎚山から二ノ森を望む

### 目次

- ・四国森林管理局長就任あいさつ…………… 2
- ・レベルアップを目指して…………… 3
- ・愛媛大学リカレントプログラム（山地災害防止論）で治山事業を説明…………… 4
- ・もくもくエコランド2022 第5回森林環境学習フェア開催…………… 5
- ・各署等のたより…………… 6
- ・針葉樹人工林を主伐再造林する際に広葉樹を残すー長野山国有林での試みー …… 10



四国山の日

## 四国森林管理局

高知市丸ノ内1丁目3-30  
TEL 088-821-2052  
FAX 088-821-4834  
H P <http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>  
E-mail [shikoku\\_soumu@maff.go.jp](mailto:shikoku_soumu@maff.go.jp)

# 局長就任あいさつ

## 四国森林管理局長



10月1日付で四国森林管理局長に  
着任いたしました遠藤です。どうぞ  
よろしくお願いいたします。

林野庁には、まだ企業特別会計時  
代の平成5年から6年にかけて林野  
庁管理課に在職しておりました。当  
時高知営林局管内にも出張し、魚梁  
瀬の千本山を訪れましたが、土佐藩  
の藩有林であるお留め山の伝統を引

き継ぎ、鬱蒼とした森となっている  
素晴らしい樹木群であったと記憶し  
ております。

四国での勤務は今回初めてです  
が、できるだけ現場に足を運び、地  
元の皆様のご意見を伺いながら、四  
国森林管理局の業務の推進に取り組  
み、四国の森林・林業・木材産業を  
盛り上げ、地域の活性化に貢献した  
と考えております。

ところで、森林・林業を巡る状況  
については、昨年6月に閣議決定さ  
れた新たな「森林・林業基本計画」  
に基づき、森林を適正に管理して、  
林業・木材産業の持続性を高めなが  
ら成長発展させる「グリーン成長」  
を掲げ、2050年までに温室効果  
ガスの排出を全体としてゼロとする  
カーボンニュートラルの達成を見据  
えた豊かな社会経済の実現を目指し  
ているところです。



## 遠藤 順也

局署等に対しては、公益重視の管理  
経営を一層推進する中で、組織・人  
材・資源を活かし、森林の適正な管  
理や、新技術を活用して伐採から再  
造林・保育に至る収支のプラス転換  
を可能とするいわゆる「新しい林業」  
の実現に向けた取組を進めるとも  
に、林業事業者の育成、市町村への技  
術的支援などの役割を積極的に果た  
し、森林・林業政策全体の推進を通  
じた地域経済の活性化に貢献してい  
くことが一層期待されております。

特に、近年局地的豪雨などの災害  
が多発しておりますが、土砂災害の  
防止や迅速な復旧事業など適切な森  
林整備を行うとともに、災害が発生  
した際には、関係市町村等への情報  
提供、人的支援など局署等の組織・  
技術・資源を活かした対応が求めら  
れております。

こうした期待に応えていくために

も、森林整備や素材生産に関する高  
い技術力を組織として維持してい  
くことが欠かせません。職員の日々の  
業務において、また、研修などを活用  
して、常に技術の研さんに努めると  
ともに、近年発展の著しいICT技  
術やドローンの活用など新たな技術  
を積極的に取り入れ、職員の技術の向  
上を図ってまいります。

また、コロナにつきましては、い  
つ次の感染拡大が来るか予断を許さ  
ない状況にあります。特に職場にお  
ける感染拡大、クワスターの発生は、  
業務の継続性の確保の観点から、厳  
に防止しなければなりません。局署  
等において、3密の回避や職場にお  
ける換気の徹底、会話時におけるマ  
スクの着用等、引き続き感染防止対  
策について徹底していきたいと思え  
ております。

最後に、局幹部が分担して各署・  
事務所に安全パトロールを実施して  
いるところですが、作業現場での  
安全確保は業務推進の基盤として最  
も大切なことのひとつです。常に安全  
確保に留意しながら四国の国有林野  
事業を担う組織として、その役割を  
しっかりと果たせるよう、職員一丸  
となって業務に取り組んでいくこと  
としております。今後ともよろしく  
お願いいたします。

## レベルアップを目指して

〈森林技術・支援センター〉

10月8～10日までの3日間の日程で、四国局大会議室において技術力維持・向上対策研修の四国ブロック研修を実施しました。

受講生は四国外を含め県職員6名、町職員1名、民間事業体職員3名及び国有林職員4名の合計15名が受講しました。

本研修は、森林総合監理士等のレベルの維持・向上のため、地域の特性等を踏まえた森林・林業の再生に向けた課題を設定し、課題の背景と解決策を共有することを目的に実施するもので、四国ブロックの課題は「地形に応じた効率的な架線と作業路網を組み合わせた集材作業システムと木材流通について」とし、急峻な地形に応じた効率的な架線設計と路網線形を描ける能力の習得を目的に研修を行いました。

初日は大型製材工場の現状と課題について、(株) サイプレス・スナダヤの砂田社長から、ウッドショック以降、今般の世界情勢下での今後の木材需要動向について、川下の立場から貴重なお話がありました。

次に四国局の原田資源活用課長か

らは、集材架線システムについて事前に収録した従来の架線システム「エンドレスタイラー式」による集材機・ローリンググラップル」による集材作業の動画を交えた説明を行い、その後、各班「搬出系統図」作成の演習に取り組みました。

2日目は、四万十森林管理署管内の朴ノ川山国有林で搬出間伐を実施している事業地に移動し、有利販売につなげるための採材技術の向上を目的とした採材研修を実施しました。講師の高知県森連高幡共販所南所長からは、「採材は傷・腐れ等の欠点を見逃すと、歩留まりも悪くなり、有利販売につながらなくなるので、欠点を見逃さないことが重要」等、採材の重要性について説明をいただきました。



採材研修の様子



清水社長の概要説明の様子



搬出系統図作成の様子

次に(株) 清水林業の清水社長から、事業地の概要説明と、車両系作業システムを選択した理由等について、研修生に分かりやすく丁寧に説明があり、その後、各班が前日に作成した「搬出系統図」を現地状況に照らし合わせ、机上では分からなかった地形等研修生が確認したい箇

所にドローンを飛行させ、上空からの映像で確認し、現地の条件に合った「搬出系統図」を作成しました。また、今回の実習地は車両系作業システムの現場であったことから、ミニ集材架線システムを局駐車場内に架設し、集材架線全体の索張り方式について説明するとともに電動ミニ集材機の操作を森職員の詳しい指導の下、現地での集材作業を想定した設定で、研修生に操作を体験してもらいました。

最終日は、前日作成した「搬出系統図」を基に、搬出コスト計算や国有林森林GISを活用して架線や路網設計を行い、「搬出系統図」を完成させ、その成果を市町村等の林務担当者に向けて説明するという想定で発表を行い、活発に意見交換が行われました。



電動ミニ集材機操作体験の様子

この研修を終えて、受講生からは「これまで架線集材システムを実際に計画することがなかったため、今後、生産計画を考える際の参考になった」「架線集材については地域によって技術力にばらつきがあるので、技術力の高い高知県に合ったテーマだった」等の好評な意見をいただいた一方で、「本格架線の現場の視察ができればなお良かった」「架線が主体の内容であってほしかった」「全体的に難しく理解できない部分もあった」等、現場実習において架線集材の現場を準備できなかったこと、専門用語等が多い中、架線集材システムを理解するための研修構成に工夫が必要なことなど改善点として受け止めて、今後の実践研修に反映させ、より良い研修にしていきたいと思います。

改めて、本研修を実施するにあたりまして、サイプレス・スナダヤ 砂田様、高幡共販所 南様、清水林業 清水様、内部講師の方々には多大なる御協力を賜りありがとうございました。



## 愛媛大学リカレントプログラム(山地災害防止論)で治山事業を説明

〈局治山課〉

9月16日、愛媛大学農学部森林環境管理学リカレントプログラムで、治山工事の現場説明を行いました。リカレントとは、「回復」、「循環」という意味で、「回復」、「循環」「帰還教育」や「循環教育」と訳され、社会人になっても必要に応じて学び直すため、「学び直し教育」、「社会人の学び直し」とも呼ばれているものです。四国森林管理局では平成26年に同大学と締結した「相互連携協定」に基づき「山地災害防止論」に講師を派遣しており、今年で4年目となります。

当日は林業関係を始め、各方面で活躍されている社会人の皆さん14名、大学から1名、計15名に参加いただき、愛媛大学久万キャンパス(愛媛県久万高原町)において治山事業の意義、目的などを説明の後、現在、対策工事を進めている久万高原町笠方の国有林の現場を案内しました。現場では治山ダムの型枠をどのように組み立てるのか、上流側と下流側の型枠が違うのは何故なのかといった質問が寄せられました。



国有林の現場(久万高原町笠方)

また、愛媛県の協力をいただき、平成22年度・令和2年度に施工した久万高原町直瀬の民有林の現場を案内しました。現場では木製治山ダムとコンクリート治山ダムを見学し、それぞれの設置目的、現場条件に応じて治山ダムの種類が選定されること等について説明を行いました。

今回案内した現場は、いずれも下流域に人家・県道や農地などが点在

する箇所であり、治山事業の必要性、重要性を実感いただける貴重な機会となりました。  
近年、集中豪雨などによる大規模な山地災害が全国各地で毎年のように発生しています。四国森林管理局は、地域の皆様のご理解、ご協力を得ながら今後ともその防止に向けた取組を進めてまいります。



民有林の現場(久万高原町直瀬)

# もくもくエコランド2022 第5回森林環境学習フェ ア開催

〈局技術普及課〉

10月22日、23日の2日間、「もくもくエコランド2022 第5回森林環境学習フェア」が高知市の中央公園で開催されました。本フェアは、高知県の森林環境税を活用して、県民の皆様が高知県産材の普及や森林環境保全の重要性への理解を深めていただく機会として、毎年この時期に開催されています。



オープニングセレモニー



丸太カット（中央：四国森林管理局長）

オープニングセレモニーでは、主催者であるもくもくエコランド実行委員会委員長と高知県の林業振興・環境部長からの挨拶の後、高知市長、四国森林管理局長の祝辞と続き、テープカットならぬ丸太カットにより各種イベントがスタートしました。

四国森林管理局からは、シカによる森林被害を防ぐために考案した小型囲いわな「こじゃんと1号」の展示や、高知中部森林管理署の職員が四国の山々を歩き、山や森の魅力と見どころ、地域に伝わる民話などを記した絵地図「たんね歩記」のパネル展示を行ったほか、森林の働きをわかりやすくイラストにした下敷き

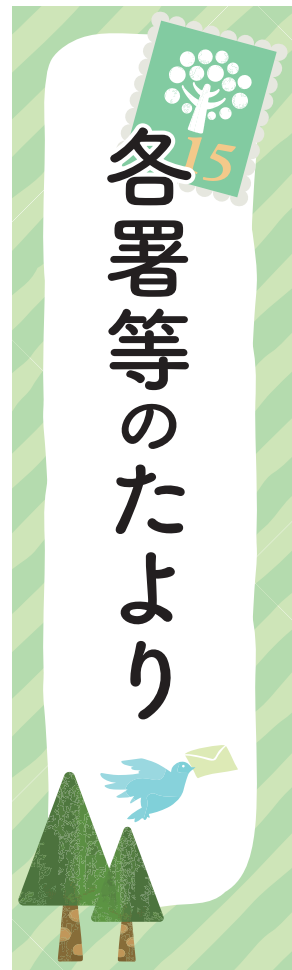
を配布しました。今回初めて展示した小型囲いわな「こじゃんと1号」は、わなの扉が閉まる仕掛けを擬似的に体験してもらうなどの工夫を凝らし、来場者へニホンシカによる森林被害の大きさを知っていただくとともに森林環境保全の重要性について理解を呼びかけました。



四国森林管理局のブース

2日間のイベントには約6千5百人の来場があり、多くの人々に木のぬくもりや森林の魅力などをPRしました。





## 森林・林業セミナー (in四万十)の初開催

〈四万十森林管理署〉

9月30日、「森林・林業セミナー (in四万十)」を開催しました。

本セミナーは、四万十森林管理署管内の各市町村の林務担当者と森林管理署職員が、森林・林業の基礎に関する勉強や意見交換を行うことで担当者の悩みや共有や課題解決への検討を行い、民国連携をより強固にすることを目的に本年度から行う取組です。

今回は、幡多地区の6市町村(宿毛市、土佐清水市、四万十市、大月町、三原村、黒潮町)の林務担当者7名が参加し、署からは若手職員を中心に8名が参加しました。

始めに、自己紹介を兼ねたオリエンテーションを行い、その後、高知



生産現場での説明の様子

県宿毛市の久才川山国有林1020林班に移動し、植村木材有限会社が実行している請負事業(列状間伐や集材作業等)箇所を見学しました。

現地では、現場代理人から、列状間伐の方法や繊維ロープの活用等について説明を受け、参加者からは、「列状間伐について、我が町では1伐3残が主流だが、今回の事業地のような2伐4残若しくは2伐5残の有利性は何か」、「繊維ロープとワイヤーロープの違いは何か」など様々な意見が出されました。

現地視察終了後、当署会議室にて、四国森林管理局が作成している『市町村への支援ツール』を紹介・説明し、意見交換を行いました。

参加者からは、「国有林の位置を把握したいので国有林の図面をいただきたい」、「我が町でもナラ枯れ被害が拡大しているのでナラ枯れ被害対策の現地検討を行う際には同行させていただきたい」、「今回、森林作業道による搬出も視察させてもらったが、次回は架線集材による現場を視察させてもらいたい」、「11月にウバメガシの植樹祭を行うので四万十森林管理署にも応援いただきたい」などの意見が出されました。

これまででは、面識がないため相談しにくかったことも、本セミナーを通じ、各市町村の林務担当者と森林管理署職員が、お互いに『顔の見える』関係を構築でき、相談しやす

い雰囲気も少しでもできたかと思えます。

今後も、この取組を継続し、須崎地区にも拡大していくことで、管内の各市町村と森林管理署の関係をより強固にし、森林・林業の発展に繋げてまいります。



意見交換の様子



## フェスに参加してみた

〈香川森林管理事務所〉

10月8日、9日の2日間、高松市内のサンメッセ香川にてウッドフェスティバルが開催され、香川所からも職員が両日合わせて8名参加しました。

初日はオープニングセレモニーがあり、志賀所長が参加しました。セレモニーでは木製のテープカットがあり、笑顔でフェスティバルが開幕しました。



笑顔が素敵なテープカットの様子  
(中央：所長)

当所のブースでは、パネル・ICT機器の展示・職場紹介のパンフレット・木工品の配布を行うこととしました。木工品については、四万十川森林ふれあい推進センターの協力により作成しました。

来場者からは、配布したパンフレットはわかりやすく良いねと言ってもらい、木工品も喜んでもらえました。



木いホルダーとふくろう



子どもへの木工品配布の様子

特に木いホルダーは子どもたちにとっても喜ばれました。展示品の中で一番注目を集めたのはドローンでした。主にドローンの使用目的や操作方法を説明しました。

来場者の中にはドローンに詳しい方もいて、機体の仕組みや、ドローンを使ってレーザー測量が出来るのではないかと、提案してください、こちらも勉強になりました。

他の林業機械については、説明の仕方を工夫し、実際にバーテックスで身長を測定して、使い方を理解してもらった上で、どういう場合で使うのか、一般の方に説明しやすい方法を若手職員で考えながら取り組んでみました。



ICT機器の説明の様子

会場では、丸太切り大会も開催されており、女性の部に香川所新規採用者、伊佐林里子職員が参加しました。その他にも建築体験や、チップの海で魚釣りなど、親子連れで楽しめるイベントが様々開催されていて、どれも大盛況の様子でした。



丸太切り大会の様子 ガンバレ！

今回のウッドフェスティバルはコロナウイルスの影響から3年ぶりの開催となりました。今回は1日目が1600人、2日目は1700人もの方が来場されていました。

各地で少しずつ、イベントも開催されて賑やかになっていきます。今回のようなイベントを通じて、一般の方にもわかりやすく国有林をPRしたいと思います。皆さんも香川においでまい。(讃岐弁で「いらっしやい」)

【香川所 村尾千尋記者】



## とくしま木づかいフェア 2022に参加

〈徳島森林管理署〉

とくしま木づかい県民会議が主催するイベント「とくしま木づかいフェア2022」が10月22日、23日に徳島県板野郡板野町にある、あすたむらんど徳島で開催されました。



丸太カットに署長も参加  
(中央3人の左端)

本イベントは、徳島県民に木材とふれあう機会を提供し、木の良さを実感することで木づかい意識をより一層高めることを目的としています。今年「木づかいから学ぶSDGs」をテーマに、子供たちが参加できる「木工工作コーナー」を3年ぶりに実施することになり、徳島県スマート林業課と徳島森林管理署との共同出展として「どんぐり木工教

室」を開催しました。

初日はオープニングセレモニーが行われ、毎年恒例の木づかいにちなんだ「丸太カット」を来賓として出席した島田署長も行いました。



どんぐりに絵描き



どの鉛筆にしようかな…



かわいいどんぐりのオブジェと  
木のストラップ (見本)

を体験しました。木工製作に関する留意点をしっかりと聞き、徳島県職員や当署職員が作成したどんぐりのオブジェやキャラクターが描かれている木のストラップの見本を参考に、親子で一緒に楽しんで木工工作をしていました。

特に好きなイラストが描ける木のストラップの評判が良く、多くの子ども達が木のストラップを作りました。中にはオブジェとストラップの両方を作る人もいました。また、徳島署で作った木の鉛筆を木工教室に参加した子ども達に配ると、実際に書けることに大変驚き、気に入ってもらえました。

今後においても、木工教室等を実施し、森林環境教育を通して木づかい意識を高める活動に取り組めます。

## 中村高等学校の地域課題 発見職場取材

〈四万十森林管理署〉

四万十森林管理署では、中学校、高等学校等への講師派遣や国有林を活用した現地実習の実施など、林業担い手育成への支援を行っています。10月11日には、県立中村高等学校から「地域課題発見」の学習として、職場取材の要請を受け当署会議室に1年生3名が取材に訪れました。



高校生の質問に対応する原口係員



初めに当署の概要について質問を受け、国有林や森林が有する機能、森林整備・保全の必要性等を説明した後、管内概要や業務内容について説明しました。続いて生徒から当署と地域の課題についての質問を受け、林業事業体や従事者の減少が林業全体の課題となっていることについて説明するとともに、安全な労働環境の必要性や低コスト化林業に向けた取り組みを紹介しました。

学校では取材結果を発表し、学年全体で共有されることで「取材する前より、森林や森林管理署の仕事内容について理解する事ができた」「中村高校生に対して何かメッセージはありますか？」との発言があり、酒井主任森林整備官から「これを機会に森林・林業という分野に興味を持って貰いたい。そして、森林・林業の持つ課題に取り組む人材になってもらえたら嬉しい」と答へ、職場取材が終了しました。

当署では今後においても様々な機会を捉え、将来の森林・林業を担う人材の育成に引き続き取り組んでまいります。

## 三嶺の森の再生を目指したボランティア活動の実施

〈高知中部森林管理署〉

10月8日、「三嶺の森をまもるみんなの会」の主催により、みやびの丘周辺（別府山53林班外）において、植生回復と森林の再生を目的に、ボランティアによるシカ食害防護ネットの設置作業を実施しました。

今回で37回目を迎えたこのボランティアは、三嶺系の山を中心に活動しており、平成19年から続く息の長い活動で、毎年幅広い世代の方々に参加していただいています。



吉良署長の挨拶



参加者が資材を運搬している様子



ネットを張る様子

管理局・高知中部森林管理署職員を合わせ、総勢85名が参加しました。開会式の後、6班に分かれて約300m分の資材を持ち、作業地へ向かいました。

作業地は登山口から歩いて20分程度の山頂付近で、傾斜が険しいところもあり参加者は互いに声を掛け合い、各班のリーダーや当署職員等の指導を受けつつ、ネットの設置を行いました。作業は参加者の頑張りでお昼過ぎには終わり、周辺の山々が眺望できる山頂へ移動し昼食を取ることにしました。

この日は天気がなかなか回復せず、曇り空の下での昼食となりましたが、身体を動かした後のご飯は晴天の秋空の如く格別の味がしておいしかったことと思います。みやびの丘では以前ボランティアで設置したシカ食害防護ネットの中で植生が回復している状況を見ることができ、防護ネットの効果や重要性を感じるこの出来る貴重な場所となっています。

今後においても多くの方々から協力をいただきながら、シカの食害から三嶺の森を守る活動を続けていきたいと思います。

次回は来年の5月頃を予定しています。ぜひ皆様もこの活動に参加されてみませんか？

## 高知中部森林管理署との 交流会開催

〈四万十森林管理署〉

四万十森林管理署では、9月28日から29日の2日間、高知中部署の職員6名と、若手職員の交流を目的とした会を開催しました。

初日は、当署管内（中土佐町）の治山・林道現場で「森林土木の学び」と題し、現地視察及び意見交換を行いました。



林業災害復旧工事現場の様子

1箇所目の林道災害復旧工事現場では、清岡森林技術指導官から、工事の概要をはじめ、災害発生から予算要求・工事発注までのプロセス、発注後に発生した問題点及びその解

決方法等の説明があり、工事の担当者は納得の表情、若手職員は複雑な表情（大変さだけが理解できたのか？）が見て取れました。

次に林道災害箇所で、復旧に係る構造物の工種・工法の説明があり、高知中部署林道担当者の食い入るような表情が印象的でした。



林道災害箇所の様子

現地視察の最後に、治山施設の施工を計画している現場では、当署治山グループの岡上治山技術官から溪流荒廃に至った経緯等が説明され、全員で現地確認を行いながら、当署から工種・工法の選定について一定の考え方を示し、高知中部署の治山担当者に違う角度からの意見を求めるなど有意義な意見交換となりました。

当署に戻り、若手職員を中心に、両署の職員がそれぞれ日常での業務や今回の交流会についての意見交換を行いました。



意見交換の様子

2日目は、13名の職員が参加し、生産現場で集材作業の視察を行いました。現地説明では、下流域に影響を及ぼさないための濁水防止対策のほか、高性能林業機械を用いた集材作業について、請負事業者の方から概要の説明があり、普段、生産現場に行くことの少ない職員は、機械稼働時の迫力に圧倒されていました。

全体を通じて職員からは「他署の職員と現場を見ることや、交流する

ことができ、貴重な時間を過ごせた」との感想がありました。

今回の交流会は、ここ数年のコロナ禍の中、集合形式での研修等が減少したことによって、他署との交流が減り「人的パイプづくり」ができませんでした。四万十署では、今後もテーマをもって工夫を凝らした他署との交流を続けていきたいと考えています。



生産現場現地説明の様子

## 小学校二校で年間を通じた森林環境教育を実施

〔四万十川森林ふれあい推進センター〕

9月8日に高知県黒潮町立三浦小学校3年生6名、4年生7名の計13名、9月28日に愛媛県松野町立松野東小学校の3年生5名、4年生2名の計7名を対象に森林環境教育を行いました。この取組は、「総合的な学習の時間」で年間を通じた森林環境教育の一環として今回、「土にすむ生物と水の土壌浸透実験」を実施しました。

最初に、「土にすむ生物」の座学で土の中の生き物の役割について説明しました。

土にすむ生物の観察では、学校の畑や花壇の土を採取し、顕微鏡で土の中の生物を見つけ出してスクリーンにその姿を映し、みんなで観察し、土の中で生活している小さな生き物の存在に気づき、その生き物たちが豊かな土を作る為に大切な働きをしていることを学びました。

次に、「水の土壌浸透実験」で、山の模型を使って「木のある山」と「木のない山」を再現し、じょうろに入れた水を雨に見立てて降らせて時間の経過と共にどういふ変化が出るの

か観察しました。

パネルとスポンジを使って、落ち葉が積もった森林の土には小さな空間がいっぱいあり、まるで大きなスポンジのように降った雨を沢山吸い込んで蓄えることができ、また、森林の土のフィルターをゆっくりと通ることによって雨水は浄化され、きれいな水が作られていることを学びました。

児童からは「実験結果や双方の違いが水の計測結果で出たので森林の持つ大切さがわかりました」、「水の土壌浸透実験で、森林の木や葉っぱがあるとこの土は大きなスポンジのような役目をしていることがわかりました」、「顕微鏡はきれいによく見ることができた。水を入れすぎたりで、生物を見つげることができなかったのはくやしけれど観察は楽しかったです」等の感想をいただきました。

当センターでは、これからも学習指導要領や教科書ともリンクした、児童・生徒にわかりやすい森林環境教育の実施に努めてまいります。



顕微鏡で観察の様子  
(三浦小学校)



スクリーンに映して観察の様子  
(三浦小学校)



山の模型を使った水の土壌浸透実験の様子  
(三浦小学校)



山の模型(木のある山と木のない山)の実験準備作業の様子  
(三浦小学校)



顕微鏡で観察の様子  
(松野東小学校)



パネルで山の模型を使った水の土壌浸透実験の説明  
(松野東小学校)



# 針葉樹人工林を主伐再造林する際に広葉樹を残す

## ―長野山国有林での試み―

森林総合研究所四国支所 森林生態系変動研究グループ

主任研究員 山浦悠一

木を伐りながら生き物を守る―私が学生だった頃は耳にもしなかったフレーズです。SDGsが注目される中、新たな試みが四万十森林管理署管内の長野山国有林で行なわれています。

「人工林は木材生産の場だから生物多様性の保全には配慮する必要がない」と何度も言われ続けました。しかし人工林で生物多様性を保全することで、森林や林業、木材の価値が逆上がる可能性があります。

2030年までに地球の30%を保護区にするという目標が世界的に掲げられています。しかし、生物多様性の保全は保護区に隔離して解決できる問題ではないとも指摘されてきました (Franklin, 1993)。そして森林を木の畑と保護区に二分する以外の選択肢がアメリカで模索され、「保持林業」として世界的に普及するようになりました。森林を主伐する際に伐採後の生物多様性や生態系を維持回復するために樹木を残すのが保持林業です。スウェーデンでは森林認証の要件としてhaあたり10本の樹木を残すことが定められており、すべて

の伐採地で保持林業が実施されています (柿澤ほか 2018)。

森林・人工林大国の日本における、生産と保全の両立を指向した新たな試み。私たちは10年ほど前、北海道の道有林でトドマツ人工林を主伐する際に自生する広葉樹を残す実験を始めました。道有林課と森林室の理解と支援を受けながら、森林総合研究所、道立林業試験場、北海道大学がチームを組んで調査を行なってきました。どのような配置で何本残せばいいのか?この問いに答えるのは容易ではありません。しかし、広葉樹を残すことの生物多様性保全上の効果が見出されています。

いよいよ本州以南のスギ・ヒノキ人工林に保持林業を適用する段階です。今年の6月、長野山国有林。森林総合研究所と高知大学のメンバーで地帯え・植栽の際に残して欲しい広葉樹をマーキングしました。スウェーデン型のhaあたり10本、30m四方当たり1本を目安にできるだけ通直で高木性の樹種を選木しました。この取り組みには、四国森林管理局計画課および四万十森林管理署に協力いただき

いています。

森林の生物多様性保全分野では、日本はこれまで傍観者でした。私たちが提案する保持林業は、針葉樹人工林で自生する広葉樹を残します。森林・人工林大国から新たな発信ができればと思っています。



写真提供・鈴木保志氏

引用文献

Franklin, J. F. 1993. Ecol. Appl. 3:202-205.

柿澤宏昭・山浦悠一・栗山浩一. 2018. 保持林業. 築地書館